

# 座間市地名 字名とその由来

	字名	由来	備考
旧大字	ざ座 ま間	座間郷の総鎮守と伝える鈴鹿明神社の祭礼は明治初年まで「イガスリ祭」と呼ばれていたという(『座間むかしむかし』第三集)。「イガスリの祭り」は大阪(難波)の坐摩神社の祭礼で、難波が防人の集結地であったことから、坐摩神社と同じく、蝦夷に向かう兵士たちの武運祈願の神社として祀られたのかもしれない。と同時に、これが「座間」の名の起こりでもあったらしい。 中世以降、坂東三十三観音巡礼の八番札所、星谷寺は近郊の村々の石造物の多くが「星の谷道」の道標を兼ねているように、当地は信仰の霊地となった。 通称「大門通り」は星谷寺の門前町として栄え、星谷寺前には座間入谷村の道路元標があつて、距離測定の基準点であつた。近世座間の中心地だったのである。	
	さまいりや座間入谷	『皇国地誌村誌』では、元和元年(1615)領主内藤清成は八王子往来に新宿を設けようとして住民を誘致し、慶安のころに至って整備が成ったことから、座間村から新宿を分村する気運が生まれ、寛文2年(1662)、領主久世大和守の検地の際から座間村は、座間入谷村と座間村(新宿の地域)に分けられたとの記述がある。また、「座間入谷」の名の起こりについても、当時の名主福田権兵衛が「入の谷」に住んでいたためだと記されている。しかし、疆域(境域)についてはもと一村であつたので、<田畑・山林等犬牙錯雑して区記すべからず、>(同書)とあるように入り組んだものが後世まで残ることになった。	
入谷1丁目	いりや入谷 (別名:入村)	座間小学校の北東角から北方への道を入った西方。 座間宿村「下宿」と座間入谷村「長宿」とが入りあっているところから「入り」ともいった。この付近に寛文から元禄のころ陣屋があつたという。座間分と座間入谷分が混在していて、座間分は「入村」と表示している。	
	おうみくほ近江久保	星谷寺墓地西下の谷の部分。現在多くは道路(入谷バイパス)になっている。 地名から推測すると鎌倉時代、星谷寺に梵鐘を寄贈した佐々木氏(所領近江国)の館があつたという伝承があるところから、これに関連があるのではないと思われる。	
	きたやと北谷戸	「富士山」と「丸山下」にはさまれた東西に細長く、東へ傾斜した低地。	
	くらやしき蔵屋敷	心岩寺参道の北側をいう。もと座間入谷村の年貢米を収納する蔵があつた場所。	
	ごおうにし牛王西	県道入谷バイパスの町田へ向かう坂上で、市天然記念物の櫛のある護王姫明神の西方一帯である。 また、明神の前方を「牛王前(ごおうまえ)」という。	他に「牛王前」がある。
	ごとまき五斗時	入谷の諏訪明神社西方の田んぼの中ほど。 一般には5斗の種を蒔く広さ、もしくは5斗の種を蒔いて育てた苗を植え付ける広さの水田であつたと思われるが、現地はもと湿田であつたので、それだけの種を必要としたというのであろう。	
	すずか鈴鹿	鈴鹿明神社と龍源院を含む一帯をいい、心岩寺から梨の木坂下までを「下鈴鹿(しもすずか)」といい、その西方を「鈴鹿前」、さらに「五斗時」をはさんで「鈴鹿前谷中(すずかまえやなか、矢中とも書く)がある。 座間郷の総鎮守とされる鈴鹿明神社(郷社)のほか2寺があり、藤沢街道に沿い、丘上を鎌倉古道が通っていて、座間郷の中心地と考えられている。 明治17年(1884)、座間入谷村ほか4ヶ村連合役場が置かれ、明治37年(1904)に座間村役場となり、平成7年、緑ヶ丘に移転するまで、市庁舎があつた。 地名の「鈴鹿」は、伊勢の鈴鹿山・鈴鹿峠が有名だが、もとは伊勢の郡名で鈴鹿川が起りであるといわれている(万葉集に「鈴鹿川八十瀬わたりて誰ゆゑか夜越に越えむ妻あらくに)がある。「すずか」は篠処の意で(古語で篠を「すず」といった)、流れに篠竹の多い土地をいうそうで、座間の鈴鹿も湧き水の下流にあり、そのような場所で、あつたと考えられる(篠川=すずかわの転訛も考えられる)。	他に「鈴鹿前」「下鈴鹿」「鈴鹿前谷中」がある。
	すわまえ諏訪前	諏訪明神の名から、石段下西方に「諏訪前」「諏訪前谷中」があり、排水路に架かる橋を「諏訪前橋」という。 また、「諏訪上」の一部に座間分の「諏訪ノ入(すわのいり)」がある。	他に「諏訪前谷中」がある。
	たなかじり田中尻	県道町田厚木線、NTTの十字路から入谷バイパスにかけての東部をいう。河原宿の「田中」の南の端(尻)にあたる。 現在は座間の中に入れられているが、土地宝典では座間分と座間入谷分が混在している。	
	ながじゅく長宿	鈴鹿明神社北方の集落で、番神水が流れ、北方に円教寺がある。 もと「長宿」は護王姫社近くの鎌倉古道沿いにあつた宿場で、ここから11戸の家が現在の地に移り住んで、そのまま「長宿」を称したという。 長宿は「おさ宿」で、付近の中心的な集落であつたところからといわれたとする説がある。『座間古説』によると、もとの「長宿」から今の地に人々が移り住んだのは鎌倉幕府が倒れた時期とある。南の閻魔堂前に「南長宿」という小字がある。	他に「南長宿」がある。
	ばんじんうえ番神上	円教寺の東に三十番神を祀る番神堂があり、そばから湧き出る水の流れを「番神水」という。生活用水に利用された。 寺伝では、文永8年(1271)、佐渡に流罪となつた日蓮上人が鈴木弥太郎貞勝(のち、円教寺の開基となつた)の屋敷で休息したとき、刀工であつた貞勝が良い水に恵まれていないことを告げると上人は傍らの石にお題目を書き、法華経を唱えながら地をうがったところ、こんこんと清らかな水が湧き出したという。 番神堂背後の丘を「番神山」、小字を「番神上」という。	
まるやました丸山下	小田急線「相武台前4号踏切」の西北方を丸山といたらしく、「丸山不動尊」(修験大坊の本尊)が祀られている。 『座間古説』によれば、龍源院はもと「丸山下」にあつたとされているが正確な位置はわかっていない。 「丸山」は座間地区の北方にも小字がある。		
みやのまえ宮の前	鈴鹿明神社の西方の小字で、もと市庁舎のあつた付近である。 この小字の北の一部で、「南長宿」との間を「宮下」とも呼ぶ。また、明神社の西南に「宮ノ西」の小字もある。	他に「宮ノ西」がある。	
よこまち横町	主要地方道相模原・茅ヶ崎線と入谷バイパスの交差点あたりから入谷ハイツの西側部分あたりまでをいう。 この場合の横町(よこまち)は、町中にある横町(よこちょう)と違って「まち」は田んぼの区画を表わす。したがって横に細長い区画(まち)のはずであるが、この小字は方形に近い。個々の田んぼが細長かつたからだろうか。		



	字名	由来	備考
入谷2丁目	牛池	JR入谷駅付近の線路に沿った西方一帯をいう。 『座間古説』によれば、永祿のころ(1558~'69)までこのあたりを相模川が流れていたが、西方に流れを変えたと記されている。そのあとが池として残ったと考えられ、これを「牛池」といい、地名となったらしい。 地名の由来には、①牛馬の死骸を捨てた場所だったから。②ウシ(蛇籠=竹籠に石をつめて護岸用とした)があったから。などの説があるが、ここでは付近に「内田」「内田下」の地名があることから、「ウシ」は「ウチ」の訛りで、牛池は「内池」だったかもしれない。また、「ウチ」には「フチ」の転訛かとする説もある。 「牛池台」は自然堤防の名残りであろう。JR相模線はこの堤防上に設けられたようである。	他に「牛池台」がある。
	内田	現在の河内住宅のあるあたりの地名で、座間地区にまたがる部分もある。 西方を古川(もとの相模川)が流れていたという伝承があり、この場合の「内(うち)」は川から手前の集落内の意味と考えられる。別に、「うち」を「縁(ふち)」からの転訛とする説もある。	
	内田下	西北方の一部を「内田下」という(元来は、やや低くなっていたと思われる地形である)。	
	榎戸	皆原の西南、海老名境で府中街道が石名坂へかかる手前のあたりをいう。 むかし、堤防の固めに松が植えられていたので「松戸」といったが寛文のころの五ヶ村用水の工事にあたり、榎を植えたので「榎戸」といわれるようになった。この場所の桜田川(しじみ川ともいった)にかかる橋を「榎戸橋」といった。	
	大下モ河原・大下	「牛池」の西方、鳩川にかけての一帯をいう。「下河原」より下(南)にあたる広い地域でこの名がある。	
	神井戸根付	神井戸の北西側、もとは水田であったが、深田で耕作に難儀した。今は、養護学校の敷地内になっている。 「根付」は崖面の下あたりをいう。	
	神井戸前耕地	「耕地」は「河内」とも書かれる。桜田前耕地の中に点在する地名で、もとは養護学校の敷地の西側にもあったという。	
	神井戸谷内	「神井戸根付」の西方にあたる。 土地では、湿地帯を「や」(谷、矢を使う)といったようで、「やつぽ」という言いかたもあった。一部に「神井戸矢崎」といわれた部分もある。	
	雉子ノ尾	JR入谷駅とその東方一帯をいう。もとは雉の尾のように南北に細長く、自然堤防の微高地だったのだろう。 古くは集落が存在したともいわれている。尾の先にあたる南の部分「下雉子ノ尾」という。	他に「下雉ノ尾」がある。
	沓形	現在の座間警察署の周辺の地名である。 耕地整理により平坦な地形であるが、耕地整理前には、南方からくつ形をなした浅い谷が入り込んでいたという。 「くつがた」という地名の由来は「あくつ潟」という湿地を表す言葉が転訛したものといわれ、「沓形」の字名はこの由来からつけられたと思われる。現在、「くつがた」の名は「くつがた公園」「ハイムくつがた」の名にわずかに残されているにすぎない。 「沓形前耕地」は「沓形」西方に字名がある。	他に「沓形前耕地」がある。
	桜田根付	神井戸の西方の水田をいう。現在、座間高校の敷地内となっている。	
	桜田前河内・耕地	西方、JR相模線に接した水田地帯をいう。	
	桜田矢ノ内	座間高校と西方の用水堀をまたいだ一帯で、桜田姫の塚がある。 用水堀の橋を「桜田橋」という。「や」(谷・矢)は水の湧き出ることをいったようで、そういう場所は多く谷間で、あったことから「谷」の字が使われた。現地は谷間ではないが、湿地であったことから、「矢の内」の地名になったものと思われる。	
	しみす水	現在は入谷小学校の敷地になっているが、崖下の湧水(清水)を利用した水田だったことからこの名がある。 水に便で、座間で唯一二毛作ができたという。	
下ノ掃	皆原の崖下を「はけ」と俗称している。「はけ」は「崖(がけ)」のことで、音から「掃け」の字をあてた。 「下ノ掃」は石名坂から海老名境までの地で、「下」は崖下と南の両方の意を含むものか。 作り道根付との中間に「下ノ掃根付」、北方に「下ノ掃前河内(耕地)」「下ノ掃谷内(やのうち)」「下ノ掃向(むこう)」がある。	他に「下ノ掃根付」「下ノ掃前河内」「下ノ掃屋谷内」「下ノ掃向」がある。	
作り道根付	皆原と桜田住宅の境の崖下の道。 「作り道」とは、作られた道の意味で、このあたりの崖には、6、7世紀の横穴墓があり、古い道であろうといわれている。 「根付」は崖下を意味しこの小字は桜田住宅の東の一部にあつている。西方の水田地に「作り道矢ノ内」(谷内とも書く)「作道前河内」(耕地とも書く)がある。	他に「作り道矢ノ内」「作り道前河内」がある。	
見取場	鳩川左岸で、海老名市に近く「見取場」「見取台」がある。 川沿いの荒れ地と、それに続く細長い台地で、作物の生育が悪かったので、検地にあたり収穫量を分量で見積もったところから名付けられた。	他に「見取台」がある。	
入谷3丁目	一本杉	星谷寺の東方、三峰山のふもとに、むかし一本の杉の木があつて地名になった。 星谷寺に残る縁起では、かつて寺が北方の本堂山にあつて火災で焼失したとき、本尊が自らこの杉の木に避難されたという。	寺縁起(1743年)では二本杉
	入の谷	県立座間谷戸山公園の西北の谷、小田急線にまたがる地をいう。 寛文年間に座間村が座間入谷村と座間宿村に分かれたとき、当時の座間村の名主福田権兵衛が「入の谷」に住んでいたため、座間入谷村としたという。現在の「入谷」の名の起こりである。	
	入の谷戸	谷戸山公園内、米軍貯水地東下(ひまわり公園)の場所で、座間分の「入谷戸(いりやと)」の部分を含んでこの地名とした。 湧水があつて、サワガニなどが生息していたところである。	
	衛門谷戸	県立座間谷戸山公園「体験館」の東。現在は木立ちの中になっている。衛門の名の由来は不明である。	



字名	由来	備考
おおやと 大谷戸	県立座間谷戸山公園の本堂山東下の谷の部分。 山林中に深く切り込んだ谷なので「大谷戸」と呼ばれたらしい。「大谷戸」南の一带を「大谷戸下」という。	他に「大谷戸下」がある。
おきのやと 沖の谷戸 (別名：沖ノ谷ツ)	大谷戸下の東北部。 「沖」は、ここでは「奥」の意という。湧水のあった狭い谷で、現在、「谷戸の井戸」(県立座間谷戸山公園内湧水口)のある付近をいう。	
おっこし 打越	県立座間谷戸山公園の東方を越え、栗原へ出る丘なのでこの名がある。旧巡礼街道・旧星谷街道の北側になる。 東隣りの地に、北から上・中・下の「打越」がある。「おっこし」は「打越し」の土地の訛り。	他に「上打越」「中打越」「下打越」がある。
かわごま 川駒	座間駅東方の丘で、皆原方面から北方へ登る坂を「川駒坂」といい、坂上を「川駒上」という。芝原へ通う急坂であった。 川駒はあて字で、「かわごま」は「かごま」がもとと考えられる。「かごま」は「籠馬」であろう。馬を囲いおく場所で、馬籠・馬込(まごめ)も同じ。籠馬は音読みで「ろうば」という。栗原の「老場」がこれにあたる。 この坂下あたりに牛馬などの埋葬場があったともいわれているが「馬場」などの地名伝承もあるらしく、かなり古い地名のようである。 坂の途中に「西ノ宮大神宮」が祀られていたが、現在は鈴鹿明神社に合祀されている。川駒坂の坂上を「川駒上」という。	他に「川駒上」がある。
こうしんきた 庚申北	この庚申にちなむ三つの字名は三峰台にある明和5年(1768)4月に建立された庚申塔(通称「榎庚申」)から名付けられた字名であると伝えられてきた。しかし、周辺の字名と比較すると、いかにも新しい字名なので、資料等は現存しないが「榎庚申」が建立される以前に「庚申塚」が存在し、その庚申塚がこの庚申の字名になったのではないかと推測される。 この三つの字は県立座間谷戸山公園をはさんだ南北に位置し、庚申北が県立座間谷戸山公園の一部で、庚申下と庚申南は東建座間ハイツ等の住宅地の一部になっている。	他に「庚申下」「庚申南」がある。
じぞうまえ 地藏前	星の台の鎌倉古道沿いにもと地藏尊の石塔(現存しない)があったので、その一画をいう。	
しもやました 下山下	三峰山の南側で、切通し道の南一帯をいう。 一部に山林が残っていたが、現在住宅地となっている。名前は、山下の下(南)からか、「下山」が別にあってその下なのかはっきりしない。	
じゃあなやと 蛇穴谷戸 (別名：蛇窪谷戸)	県立座間谷戸山公園の池のあるあたりから奥の一帯をいう。 湿地で、蛇がたくさんいたというが、「蛇穴」は「竜穴」と同じで水のわき出るところという説がある(現在も水道水の出口を蛇口という)。語源としてはむしろこの方を取りたい。	
だいほうやと (じゃくほやと) 大坊谷戸	県立座間谷戸山公園の西入口付近に、むかし大坊(瀧谷山現星寺)という修験寺があったことからつけられたこの地の字はもと「星の谷」といい、星谷寺の名の起こりとなった。	
だいもん 大門	星谷寺門前で、大門通りをはさんで「東大門」と「西大門」がある。 むかしは門前町として宿屋も数軒あったという。通りも今より広く杉並木があつて、「杉大門」とも呼ばれていたが、杉は慶応3年(1867)に伐られた。明治10年(1877)に馬場に改造され、明治時代には観音の縁日に草競馬が行われたりしていた。 昭和初年ころまでは自転車競争などの催しに利用されたという。 全国を修行行脚して『日本九峰修行日記』を残した日向佐土の修験僧泉光院が文化14年(1817)5月13日、星の谷観音に参詣し、門前の宿に一泊した記事を残している。	他に「東大門」「西大門」がある。
つみねだい 三峰台	星谷寺東方の小山で、三峰山ともいう。頂上に三峰神社があるところからこの名がある。 標高93.4mで、本堂山とともに座間での高所である。神社脇を星谷寺の巡礼街道が通り、かなりの難所であった。 西麓に庚申塔・馬頭観音等の石塔、東麓に庚申塔(榎庚申)がある。現在は県立座間谷戸山公園に組み込まれている。	
なかやと 中谷戸	県立座間谷戸山公園「伝説の丘」の西麓で「入の谷」と「大坊谷戸」の間。 中央を小田急線が通っている。鎌倉古道沿いに近く、歴史的に古い土地でその名は「中谷戸公民館」に残されている。	
ふじやま 富士山	キャンプ座間東方の山で、富士山公園一帯をいう。 山上に浅間神社があったことからこの名があるが、明治42年、座間神社へ合祀された。 また、頂上に士官学校時代の名残の方位盤がある。西方山下の小字を「富士山下」というが、ここは明治以後国有林になり、昭和11年までは学校林であったが、その後、士官学校に買収された。	他に「富士山下」がある。
ほしのい 星ノ井	「星ノ井」は星の谷観音堂の東方で小田急線をまたいでいる。 『新編相模国風土記稿』に「白屋に井中星影見ゆと云ふ」とあり、観音堂七不思議の一つとされる。 現在の星の井は寺内西方の庭にあるが、むかしの井戸は東方のこの地にあつたようである。	
ほしのだい 星の台	「西大門」の西側で、心岩寺裏崖上の鎌倉古道までの地をいう。 児童公園に「星の台土地区画整理竣功記念碑」があり、「西大門」「諏訪の上」「地藏前」一帯を住宅地とするため区画整理を実施し、昭和39年に竣功、「星の台」と命名したことが記されている。北部を「地藏前」南部を「諏訪の上」といい、両方とも児童公園にその名が残されている。 このあたりは4,000～4,500年前の縄文遺跡の地である。現在は全く住宅街となっている。 地名は「星の谷」に因んだものと思われる。	
ほしのや 星の谷	星谷寺はもと北方の本堂山にあつたといひ「星の谷」の地名も「大坊谷戸」の旧名だったという。寺が現在地に移って字名も移ったものである。 寺縁起(寛政3年1743・僧龍覚書)に、南の谷の水は「星の夜には清光を発しあまたの夜光の珠を転がすごとくして、見る人躊躇せずといふことなし、これゆゑに誰人の名づくともなく星の谷といふ」とある。星谷寺の名の起こりでもある。 「星」のつく地名の由来には、山上で星を見て天気予報をしたからというもの、いん石が落下したからというもの、星を法師(ほうし)ととって修験寺があつたからとするもの、軍隊の施設があつて、その象徴の星から名付けたとするもの、妙見信仰からくるものなどがあるが、座間の「星の谷」は、図星とか中心を意味する「ほしの谷戸」からと思える。	
ほんとう 本堂	県立座間谷戸山公園「伝説の丘」を本堂山といい、小字を「本堂」という。むかし、ここに星谷寺観音堂(本堂)があつたと伝る。 北方の後背地に「本堂北」「本堂下」があり、南の坂(府中街道)を「本堂坂」という。	他に「本堂北」「本堂下」がある。
みょうおうどう 明王堂	むかし、不動明王の堂があつたと伝える。県立座間谷戸山公園北部の米軍貯水池のあたりをいう。 北部、西部に「明王堂北」「明王堂西」、東部に「明王堂下」の小字がある。	他に「明王堂北」「明王堂西」「明王堂下」がある。



	字名	由来	備考
入谷4丁目	いりり	小田急線座間駅から通称「天台」へ登る道の両側。「入り」とは村への入り口や、地形が入りこんだ場所をいうが、この場合は後者のようである。むかしは湧き水の多い場所であった。現在、大六天が祀られている。	
	おおかみくぼ 狼久保	座間ハイツの東部にあたり、かつて谷が入りこんだ複雑な地域で、木々に覆われ狼が出没したという伝承からこの名がつけられた。	
	かみのみね 上ノ峰	座間駅東方のいちばん高く見える場所で、雑木林だったが最近住宅地となっている。	
	くりはらさが 栗原嵯峨	栗原嵯峨の「嵯峨」の字をみると、優雅な京都嵯峨の地を思い出すかもしれないが、「嵯峨」の意を調べると、「険しい崖」のことで「坂」の意味も含まれているといわれている。 この地は星の谷街道と巡礼街道の分岐点にあたるので、栗原嵯峨の名より古くから「わかされ」の名で知られている。星谷寺から三峰台を經由して「わかされ」の分岐点までは坂がつづき、左右は「険しい崖」で、その上あたり一面は鬱蒼とした樹木でおおわれ、昼でも薄暗い道であったという。まさに「嵯峨」の名に該当する地形で、あったようだ。 現在、この場所の大部分は市営第一配水地で、近年道路も整備され、かつての字名栗原嵯峨の面影はない。 この栗原嵯峨の周辺の坂を入谷では「栗原でい(台)の坂」「だらだら坂」といっていたという。	
	ぜんこうやと 善光谷戸	羽根沢東方の崖付近をいう。 地名の起こりについてはわかっていないが、むかし誰かが隠れ住んだという話もある。	
	だいやま 台山	上羽根沢東方の台地をいう。	
	たかのみね 鷹ノ峰・鷹峰	旧名を立野山(たちのやま)といい、台山の東南方のいちばんの高所。 「立野」の由来は文字通り「野が立つ」で、この辺はそういう地形である。一般には、耕作に適せず多くは秣場としての入会地だったので、入会地の名にもなった。 立野山は『夫本和歌抄』に読み人知らずとある「相模なるたちの山のたちまちに君にあはむと思はざりしを」が知られている。相模で立野山は大磯にもあるが、この歌は座間の立野山である可能性もある。むかしは、松杉林立した眺望の名所で、あったという。 旧座間八景には「鷹の峰の暮雪」があげられている。しかし、今はほとんど住宅地となってしまった。	
	たかばんづか 鷹番塚	羽根沢の奥の高地で主要地方道藤沢・座間・厚木線の南、現在、東建座間ハイツの北部台地。 江戸時代、幕府直轄の鷹狩場とされ、鷹狩りのときの見張所があったところをいう。この東側高地の中腹に6～7世紀の横穴墓が発見された。 道路北側(現在、やとやまログハウスの斜面を「鷹番塚北」(下と書かれた文書もある。入谷3丁目)、東建ハイツ中央部を「鷹番塚下(たかばんづかした)」という。	他に「鷹番塚北」「鷹番塚下」がある。
	てんだい 天台	座間駅東方の台地で高い所。いま「老人憩いの家」のあたりをいい、眺望の優れた場所である。 付近一帯にこの名を冠した自治会が数か所あり、「中峰」「中丸」あたりまで地名も範囲が拡大されている。 「天台」とは、一般に台地の頂上をいう名である。	
	なかまる 中丸	中峰の東側で、もとは三方が谷で独立した小高い丘であった。 現在は開発のためこのような地形ではなくなって住宅地化されている。また、この地に歴史的な口伝はない。 座間にはこのほか栗原に2か所「中丸」と呼ぶ小字がある。	
	なかみね 中峰	座間駅東方の丘で一番高いところ。横浜銀行わきの急坂を登ると「老人憩いの家」があるが、その南方にあたる。	
	にしのみや 西ノ宮	小田急線座間駅東方の「川駒坂」を上るあたりに西ノ宮大神宮と呼ばれた社があった(現在は鈴鹿明神社に合祀)。 これは、兵庫県西宮市の戎神社から分祠された(正保年間、1644～48) 恵比寿講の社で、本社の名から「西ノ宮」と呼ばれた。「西ノ宮下」(入谷5丁目)はその西方の崖下で、座間駅を含む一帯をいう。	他に「西ノ宮下」がある。
	ひょうごやと 兵庫谷戸	「中羽根沢」の北、「中丸」とにはさまれた小さな字。 「兵庫」の名のいわれは伝えられていない。なお、明治20年代の土地台帳(「田畑其外取調野帳」)には「兵庫谷戸」と「中丸」の一部を「皆原谷戸」とした記載もある。	
みねくぼ 峰窪	主要地方道藤沢・座間・厚木線天台バス停北方の、「中峰」と「中丸」にはさまれた南北に細長し、小字。 峰と峰の間の窪地であることからの名であろう。現在はすべて住宅地となっていて、むかしの地形は残されていない。		
むかいこうしんきた 向庚申北	栗原嵯峨で星の谷街道と巡礼街道が分岐する地点を「わかされ」と呼んでいた。この「わかされ」にはかつて「向庚申」と呼ばれ道標を兼ねた庚申塔があった。この庚申塔と三峰台の「榎庚申」とが向き合うような形で建っていたので、「榎庚申」に対して「向庚申」と呼ばれ、地元の人々に「わかされ庚申」と呼ばれ親しまれていた。この「向庚申」が北側の「向庚申北」、南側の「向庚申南」の字名のもとになったと言いつたが、「榎庚申」と同じように庚申塔が建てられる以前に「庚申塚」があつて、その塚から字名が生まれたと思われる。	他に「向庚申南」がある。	



字名	由来	備考
しもはら ～ばら・もつばら 下モ原・下原	皆原の「原」とよばれる地域の南方(下)であることから「しもばら」とされる。地元では「しもつばら」という。海老名境で、現在境を越えた海老名側も「下原」というが、もとは座間分であったものを譲った地域であろう。県道杉久保座間線をはさんで西側を「西下原」という。海老名境で、現在境を越えた海老名側も「下原」というが、もとは座間分であったものを譲った地域であろう。県道杉久保座間線をはさんで西側を「西下原」という。	他に「西下原」がある。
かみいど かめいど 神井戸	座間高校の北東前の湧水のある一帯で、湧水は今も農具、野菜、衣料の洗い水として利用されている。水神の石祠があり、神の水として貴ばれていたものであろう。鈴鹿明神社の祭礼では、神輿を担ぐ若者が白丁を洗ったという。水は関東大震災でも潤れなかったそうである。かつて根下一帯は豊かな湧水が出ていたが、台地の開発により大多数の湧水が枯渇、または水量が減少してしまった。	
さんのうやま 山王山	皆原の金毘羅神社が祀られている山を「山王山」というが、もと山王社があったことからといわれている(今は金毘羅神社合祀)。山下の西方一帯を「山王前」といい、もとは助給院(現在廃寺)があり、付近を「堂山」ともいった。今も阿弥陀堂が残されている。	他に「山王前」がある
しもみね 下モ峰・下峰	皆原の山王山より南で、「山王前」と「羽根沢」の間の南北に細長い山林地だった。現在は住宅地となっている。	
しもやと 下谷戸	羽根沢の南方で、海老名市に接した地域。南方(下)の谷戸であることから呼ばれたと思われる。羽根沢川に架かる橋を「下谷戸橋」という。	
すわうえ 諏訪上	諏訪明神の東、鎌倉古道の東方一帯をいい、現在は住宅地となって「諏訪の上遊園地」がある。諏訪明神の名から、石段下西方に「諏訪前」「諏訪前谷中」があり、排水路に架かる橋を「諏訪前橋」という。また、「諏訪上」の一部に座間分の「諏訪ノ入(すわのいり)」がある。	
せいそうほう 清造坊	皆原の山王山の南方で、「羽根沢」と「下羽根沢」の中間にあたる。現在も荒地の状態、むかし修験堂があったという口伝もあるが詳細はわかっていない。	
なんこうほう 南光坊	下羽根沢東部根下の一帯をいう。口伝では、ここにかつて同名の寺房があったという。「南光坊」の記録は星谷寺(真言宗)の過去帳に末寺としてあり、羽根沢に現存する「諸龍地蔵」は真言宗の六地蔵に名のあることから、南光坊に関連するものと考えられる。	
ねした 根下	梨の木坂下から南方にわかれる道に沿う崖と崖下部分をいう。「根下」は丘や山の裾にあたる土地をいうが、このあたりは湧水を利用して古くから数戸の集落があった。	
のぎわけ 野際	皆原の「原」の南に続く丘の斜面で、「のげ」は、横浜市の「野毛山」と同じくややゆるやかな崖面をいう。「下原」の東方で海老名市に接している。	
はしど 橋戸	中羽根沢から東の坂へ登る芝原道の手前に架かる橋(羽根沢橋)のそばの小字。「戸」は「処」で、場所を表す。橋は現在暗渠になっている。	
はねざわ 羽根沢	座間駅東側の丘と立野台との間の谷で、谷の部分は南北に細長く、北から南に「向上羽根沢」「上羽根沢(2か所あり)」、栗原分「羽根沢(鷹の峰)の北側にも1か所あり)」、「中羽根沢」「向羽根沢」「羽根沢」「下羽根沢」「向下羽根沢」となっている。「はね」は「はに」で、赤土をいい、東京の羽田・赤羽などはこれを語源とする。中央を流れる羽根沢川の浸食による谷で、1200～1300年前の横穴墓が9基発見され、古くから人が住んだことが知られた。周囲から独立したような地形である。川沿いは水田だったが、現在はほとんど住宅地となっている。	他に「上羽根沢」「向上羽根沢」「中羽根沢」「下羽根沢」「向羽根沢」「向下羽根沢」がある。
はら 原	座間駅から南の平地の一帯をいう。丘裾の湧水を利用した古い集落がある。西方に「原ノ前」、南に「原ノ上」、「原ノ下」の小字がある。	他に「原ノ前」「原ノ上」「原ノ下」がある。
ぼんてんやま 梵天山	「梵天山」は、府中街道が西方から入谷の丘に上る石名坂(別名おしな坂)の西崖面をいう。この地とくに信仰にまつわる伝承はないが、秦野市内にいまも残る梵天講は出羽三山信仰の講中で、出羽三山供養塔を「梵天さま」といっている。皆原も三山信仰の盛んであった時代があるので、その石造物がこのあたりに存在したのかもしれない。また、俗には毘沙門天・多門天などを祀る例もあるが、城の入口で人数を計る枡形を梵天というので、ここでは入口の意味での転用も考えられる。	
みなばら 皆原	大門通りの南、座間駅前信号角のマンションから南への県道杉久保座間線沿いの小字である。加えて周辺一帯をも皆原と呼び、皆原村と呼ばれたこともあった。「皆原」は明治からの書き方で、江戸時代には「南原」と書かれていたものが多い。星谷寺や鈴鹿明神社のある古い集落からみて、南方に開けた開拓地だったのだろうか。また、「陽原」と書かれた古文書もある。「皆原」に続いて南に「下皆原」がある。	他に「下モ皆原」がある。
	<h3>谷戸(やと)について</h3> <p>山や丘に固まれた谷あいとその一帯をいう。「谷」一字でヤトと読むところもある。また、「ヤツ」と呼ぶ地域もある。湧水があり、風害を避けた地形で、古くから田畑が拓かれ、集落も付近に形成されていった。</p> <p>座間では、県立座間谷戸山公園とその付近を「谷戸」といい、谷戸村という呼称もあった(大坊谷戸の地蔵尊銘文には、「谷村(やとむら)」とある)。</p> <p>「入谷」はむしろ谷戸の一部であったが、江戸初期の名主が入谷に住み、分村にあたり「入谷の組」といわれて、「座間入谷」が成立し、村名、大字に「入谷」が残ることとなった。</p>	



# 座間市地名 通称名とその由来

	通称名	由来	備考
入谷1丁目	きのした木下	座間小学校正門前方にある旧家に大きな榎の木があったところから、付近を「木下」といった(藤沢街道が通っていた両側である)。『座間古説』にも「木の下」の記事があり、古くから呼ばれていた小字のようである。字内に昭和10年ごろまで製糸工場があった。	
	すぎたやのさか杉田屋の坂	長宿東端から谷戸方面へ通じる農道の坂で、坂の上がり口にあった家の屋号から名付けた。	
	ほしのやざか星の谷坂	星谷寺門前から西方へ下る坂をいうが、鈴鹿坂・観音坂・大門坂などともいう。	
	ほんぜんざか盆前坂	「長宿」から東の丘へ上がる坂で、梵天坂ともいう。「ボンゼン」はやはりボンテン(梵天)を訛ったものであろう。ここも丘の台地への入口だが、三山信仰にまつわるものがあったかもしれない。丘上の墓石のあるあたりを「盆前塚」という。	
	ばんじんすい番神水	円教寺の東に三十番神を祀る番神堂があり、そばから湧き出る水の流れを「番神水」という。生活用水に利用された。寺伝では、文永8年(1271)、佐渡に流罪となった日蓮上人が鈴木弥太郎貞勝(のち、円教寺の開基となった)の屋敷で休息したとき、刀工であった貞勝が良い水に恵まれていないことを告げると上人は傍らの石にお題目を書き、法華経を唱えながら地をうがったところ、こんこんと清らかな水が湧き出したという。番神堂背後の丘を「番神山」、小字を「番神上」という。	
りゅうげんすい龍源水	龍源院湧水の流れをいう。付近は整備されて「鈴鹿の小径」の名で親しまれるようになった。また、新座間八景にも「湧水と歴史の街並鈴鹿長宿」としてあげられている。下流は鈴鹿明神社境内を通り、周囲の水田を潤していた。		
入谷2丁目	こやなぎばし小柳橋	座間高校の西方、田んぼの中にあつたという小柳姫の塚にちなみ、近くに架けられた橋の名にした。	
	さくらだ田	座間高校からJR相模線までの一帯をいう。	
	ふるかわ古川	『座間古説』によると、相模川は「牛池」(現在JR入谷駅西方一帯)のあたりを流れていたが、永祿のころ(1558~70)川筋がしだいに西方に移り、川の跡を古川といった。流路であったと想像される土地の字名の区画は川に沿ったように細長い。	
入谷3丁目	かんのんざか観音坂	西方の入谷バイパスから星谷寺門前へ上る坂で、星の谷坂・鈴鹿坂・大門坂・谷戸坂ともいう。坂上で鎌倉古道と交差する。	
	さんねんざか三年坂	星谷寺裏の鎌倉古道を北方へ下る急坂をいう。座間にはもう1か所栗原にも「三年坂」がある。「三年坂」とよばれる坂は、京都をはじめ各地にあるが、関東ではなぜか東京(4か所)と座間だけらしい。名前の由来ははっきりしないが、大体この坂で転ぶと3年後に死ぬという口伝をもつ。また、多くはその坂上に仏寺が存在する。寺の創建が3年だったからとするものや(京都三年坂のある清水寺は大同3年創建という)、参詣にちなんだ仏語からとするものなどがいわれている。韓国にも同じような話が伝えられていて、これはある峠で転ぶと3年後に死ぬというものである。急坂であるところから、転ばぬように戒めたものか。	
入谷5丁目	いしなざか石名坂 (別名:お品坂)	皆原の南西、海老名境の榎戸橋から、河岸段丘を東北に上る坂道(長さ168m)。坂上で鎌倉古道と交差する。この段丘は砂礫層が露出して歩行に難儀したと思われる。地形から、いしな坂は「いしの坂」といってよさそうである。海老名の下今泉や外記河原からの府中街道の最初の坂で、坂上に行き倒れの巡礼を弔ったと思われる地藏尊の石仏がある。「お品坂」ともいうが、「いしな」「おしな」の語呂が似るからで、お品という美女がいたことになり、「お品伝説」が生まれたのであろう。	坂下の榎戸付近で堤防工事に人柱を立てた。人柱になった娘「おしな」の名をとって坂道を「お品坂」と名付けた。
	かまくらこどう鎌倉古道 (別名:鎌倉街道)	鎌倉古道とは、鎌倉時代に幕府のあつた鎌倉へ通じた道でいい、県内でも幾筋かの道があるが、座間ではキャンプ座間の南部から南へ、星谷寺の裏を通過して相模川左岸段丘中段の崖上を皆原までたどる道をいう。しかし、根下坂のあたりから先ははっきりしない。北もキャンプ座間から先は不明で、「赤まんま鎌倉古道ここに絶え」(斎藤昌三・鈴鹿明神社に句碑がある)の句が知られている。道幅は狭いが、古道の様子が残る道で、付近に古社寺、古堂が残り、往古は主要な道であつたらしく、室町時代に書かれたという『唐糸草紙』の主人公万寿が鎌倉で源頼朝に仕えていた母唐糸をたずねて鎌倉へ行くのに、木曾(長野県)を出て群馬県、埼玉県とたどった末、「曇らぬかげは星の谷の、とがみ河原をもうち過ぎて、鎌倉山につき給ふ」とある。この「星の谷」は明らかに座間の「星の谷観音」である。途中、府中街道、藤沢街道の交差がある。また、崖面にはシラカシの群生がみられ、現在は樹木保全地域に指定されている。	
	こんびらざか金毘羅坂	皆原の「原」から羽根沢へ通じる急な坂道で、途中の山上に金刀比羅神社(山王社・秋葉社を合祀)が祀られているのでこの名がある。ここでは毘の字を使わず「刀」と「比」を重ねて1字にして書かれている。	
	じそうざか地藏坂	山王山から羽根沢の集落へ下る坂で、坂下に「諸竜地藏」とよばれる地藏堂があるところからの名である。	
	しばらみちのさか芝原道の坂	「羽根沢」から東北方、現在の「立野台」へ上り、入谷の人が芝原の畑へ通った坂。急な坂で難儀したという。	
	しちにわ庭下	皆原でいちばん南の集落があつたのでいわれる(字名は「西下モ原」)。府中街道と鎌倉古道沿いに不動尊や巡礼供養の地藏尊石塔がある。下庭というのはここでは南の集落の意味。	
	たっちゅうば塔頭場墓	梨の木坂上で鎌倉古道と藤沢街道がわかる場所墓地付近(「根下」と「皆原」の境にあたる)をいう。「塔頭」とは、禅宗で大寺の高僧が亡くなった後、その弟子が師の徳を慕って塔の頭(ほとり)に構えた房舎をいったが、転じて子院、わき寺をもいったという。このあたりの住民は多く心岩寺(禅宗)の信徒で、もともとここに子院があつたものか、または転じて墓地をこのようにいったものかはっきりしない。	
	なしのきざか梨の木坂	座間駅から西方の田園地へ下る坂で、『座間古説』(明和年間成立)には「梨の木諏訪坂」と書かれている。道は藤沢街道の一部にあたり、坂上で鎌倉古道と交差する。付近に諏訪明神や横穴古墳など史跡がある。	